

乳房悪性腫瘍例であった。唯一の男性例は17歳の片側性女性化乳房症の症例で同側に軽度集積をみた。乳房に Ga が集積する原因として、血中のホルモン level, 特にエストロゲンとプロラクチンとの関与が報告されている。しかし、われわれの症例でこのホルモン level の変化で説明しうるのはわずか15例中6例にすぎず、Ga の乳房集積には今まで報告されていない他の因子も関与していると考えられる。

22. 骨スキャンによる骨外性集積例について

東 光太郎	山岸 利明
宝田 陽	利波 久雄
小林 眞	宮谷 博久
浜田 重雄	西木 雅裕
山本 達	興村 哲郎
宮村 利雄	

(金医大)

二谷 立介

(福井県立・放)

^{99m}Tc -リン酸化合物の骨外性病変部への集積例が、今日まで多数報告されている。今回われわれは、 ^{99m}Tc -MDP による Bone Scan で、骨外性腫瘍部への集積例を3例経験したので報告する。

3例は、未分化細胞癌の肺原発巣への RI 集積例1例、肺腺癌肝転移の肝転移巣への RI 集積例1例、肝細胞性肝癌の肝原発巣への RI 集積例1例である。

3例とも単純 X-P にて、石灰化陰影を認めなかった。

3例のうち、未分化細胞癌の肺原発巣への ^{99m}Tc -MDP の集積例、および肺腺癌の肝転移巣への ^{99m}Tc -MDP の集積例は、われわれの知るかぎり初めての報告と思われる。

23. ^{99m}Tc -MDP におけるリンパ系シンチグラフィ (その2)

小林 英敏	佐々木常雄
仙田 宏平	三島 厚
松原 一仁	石口 恒男
改井 修	真下 伸一
大鹿 智	児玉 行弘
大野 晶子	

(名大・放)

^{99m}Tc -MDP により、リンパ管が描出されることは前回報告した。今回は、基礎的検討に、(1)右手背に皮下注射し、リンパ管が描出されている時の左右静脈血中 RI 量を測定し、差が無いことを確認し、(2)両足背に皮下注射し、その局所の RI カウントの減少する状態は、広範子宮全摘術後症例と、それ以外とは差を認め、その原因は早期に運ばれる RI 量が、広範子宮全摘術後症例で低下しているためと考えられた。応用として、広範子宮全摘術後症例で、下肢に軽度の浮腫を認めた2症例に、両足背に ^{99m}Tc -MDP おのおの 2 mCi 皮下注射した。両症例ともに、浮腫を認めた下肢は、RI の上昇は途中でブロックされ、RI はリンパ管外に漏出しているのが認められた。

24. Anti HA, Anti HBc キットの基礎的検討

金森 勇雄	木村 得次
市川 秀男	鶴田 初男
(大垣市民・特放)	
中野 哲	北村 公男
(同・第2内)	
綿引 元	武田 功
佐々木常雄	

(名大・放)

われわれは過去約10か月間、RIA 法により、Anti HA と Anti HBc を測定してきた。今回はその kit の基礎的検討について報告した。

結論(I) Intra-assay variance: Anti HA の CV はおのおの 0.8, 4.4%, Anti HBc は 1.3, 43.8% で

あり、陽性検体では非常に良好であるが、陰性検体では悪くなる傾向がみられる。(II) Inter-assay variance: Anti HA の CV はおのおの 1.6, 1.9, 14.6%, Anti HBc は 1.6, 1.9, 14.6% であり、陽性検体では非常に良好であるが、陰性検体では悪くなる傾向がみられる。(III) Incubation time: Anti HA は、短時間法で4時間、一夜放置法で18~24時間、Anti HBc は 20 ± 2 時間で安定した値を示した。(IV) Incubation temperature: Anti HA, Anti HBc とともに室温 (25°C) で良好な結果が得られた。(V) Dilution test: Anti HA, Anti HBc とともに、positive control を negative control と buffer で希釈したが、両者ともに良好な直線性が認められた。

以上、限られた kit による検討ではあるが、臨床面に十分応用できる kit であると考ええる。

25. HBc 抗体測定のための臨床的意義

鹿野 昌彦 中野 哲
北村 公男 綿引 元
武田 功
(大垣市民・2内)
金森 勇雄 木村 得次
市川 秀男 鶴田 初男
(同・特放)
佐々木常雄
(名大・放)

われわれは、ダイナボット・ラジオアイソトープ研究所の CORAB キット (RIA 法) を用いて、B 型肝炎の HBc 抗体を測定し、その臨床的意義を検討した。

対象は B 型急性肝炎、慢性肝炎、肝硬変例と asymptomatic carrier の合計 80 例である。

急性肝炎においては HBc 抗体は HBs 抗原が陽性となり、血中 transaminase が peak に達している時点ですでに陽性で、以後ほぼ同じ抗体価を取り続けた。HBs 抗原持続陽性者、慢性肝炎、肝硬変例においては、いずれも HBc 抗体価は高値

を呈し、とくに後二者の場合はその傾向が強かった。

急性肝炎と carrier からの発症は、臨床症状、肝機能検査成績などからの鑑別が困難なことが多いが、HBc 抗体を測定すると、後者においては高い Titer が得られることから、比較的容易に鑑別できることがわかった。

HBc 抗体の高値は B 型肝炎ウイルスの存在を表わしており、今後も HBc 抗体測定の意義はきわめて大きいと考えられる。

26. 赤血球寿命測定のための ^{51}Cr による赤血球標識

芝宮 勝人
(名大・放 RI)
斎藤 宏
(同・放)

過去 6 か月の ^{51}Cr による赤血球寿命測定の結果をまとめて報告する。

(1) in vivo 法における赤血球への $\text{Na}_2^{51}\text{CrO}_4$ の標識率 (3 名) 平均 10.5%, (2) in vitro 法 [ACD 液 5 ml に 20 ml 採血し $\text{Na}_2^{51}\text{CrO}_4$ を添加 ① 37°C 15 分 incubation (4 名) 95.8%, ② 25°C 室温 30 分 incubation (5 名) 92.6%, ③ 採血後遠心で清除去後 ^{51}Cr を添加 37°C 15 分 incubation 4 名 98%, 以上 in vitro における (13 名)、赤血球への ^{51}Cr の平均標識率は 95% であった。

トレーサーを患者に投与後 1 日目のフリー ^{51}Cr の試料中の割合を以下のごとく検討した。① in vivo 法で $43 \pm 24.5\%$ [4 名], ② アスコルビン酸処理 (-) $0.62 \pm 0.2\%$ [5 名], ③ アスコルビン酸処理 (+) $0.73 \pm 0.2\%$ [5 名], ②③ は測定誤差内にあり $(1 - t/T)^{-kt}$ の式に近似させ半寿命、平均寿命を求めたが、Free クロムの補正は必要なかった。

以上寿命測定の正確さ、無菌操作からくる煩雑さ、患者被曝の軽減などを考えると、 ^{51}Cr の血球への標識は ACD 液 5 ml に 20 ml 採血し ^{51}Cr を添